



冬近し

時雨しぐれの雲も

ここよりぞ
(与謝蕪村よさぶそん)

指宿でも肌寒さを感じるようになって、この蕪村の句を思い浮かべます。

7日は立冬、暦の上では冬に入ります。あちこちの家々で暖房器具を取り出し、冬支度が始まります。この時季「小春日和」と呼ばれる穏やかで暖かい日が続くこともありますが、身や心に染みる厳しい冬の足音はすぐそこに聞こえてきます。

灯火とうか親しむころです。人生に深みと豊かさを添えるため、読書に親しむ季節でもありません。

学生が本を読まなくなった、といわれます。なるほど、出張した折、電車の中を見回すと、乗客のほとんどがスマホに夢中になっています。「スマホを置きましよう。そして本を読もう」そう呼び掛けた

くなるのは私だけででしょうか。風に揺れる花を見るたび、私は国語の授業で触れた「一つの花（今西祐行作）」の場面を思い出します。

このお話は、戦争がいよいよ厳しくなり戦地へ赴くことになった父親と、それを見送る母娘おやぢが描かれています。食糧事情が悪い中、母親はやつと米を工面しておにぎりをつくり、夫に持たせます。

空腹の女の子は、お父さんがおにぎりを持っていることを知って、「お・じ・ぎ・り、一つだけちょうだい」としきりにねだるのです。母親はわが子に一個、一個とおにぎりをあげ、列車が来るころにはおにぎりは全て無くなってしまいます。それでも女の子は「一つだけ、一つだけ」と言い続けます。

すると父親は駅のホームの端に咲くコスモスを一輪つみ、娘の手にそっと持たせて言います。「一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよ…」

そう言って戦争に旅立った父親は帰らぬ人となります。おにぎりも、コスモスも別々の数え方をしないで「一つ」と数えて愛する我が子に渡す場面が深く印象に残っています。妻娘を引き離す悲惨な戦争、永遠の別れになる汽車の見送りの場面で涙を誘います。本からの感動は、幾つ歳を重ねても深く心に残っています。



指宿市長
豊留悦男とよどめ えつお